

評論「文化の窓：三輪和彦『夢想の地展』」
朝日ジャーナル，朝日新聞社，1989年11月24日号

8年前サンフランシスコから帰国し、山口県萩で制作活動を続けている三輪和彦が東京で「無想の地」展を開いている（東銀座・ギャラリー上田、11月18日まで、日曜休み）。

萩は茶陶の地である。三輪家は300年以上の歴史を持つ萩焼きの名窯の一つ。土を扱う家の三男の三輪は伝統工芸の道を歩まず、陶の限界に挑戦するかのような、「大きな」作品を発表し、作域を広げている。

1981年『恒久破壊』、84年『デッド・エンド』、そして昨秋は、窯に入り切らないドーナツ状の作品を野焼きによって完成させた。「土を用いて何が表現できるか」と問い続ける作家に土はどう返答するのか、巨大な作品ができる理由はその土からの返答の一つだろうか。

春夏秋冬の格闘の末に生まれた今回の作品は、約1トンの土をピラミッド状あるいは角状に整形し、乾燥により生じたひび割れの塊に金や銀の釉薬を施して仕上げられている。

「大地のエネルギーを自分の中に取り込みたい」と話す作家のストレートな表現そのままに、作品は一切の無駄がなく、力強い。

陶は土・水・火が持っている目に見えない自然の力に、作家の肉体から放たれたエネルギーがぶつかり合っている。すべたが燃焼しつくされた後のシンプルな世界が、見るものに静かに手渡される。そんな一瞬の手ごたえが得られる展覧会である。